神戸震災五年を経て（00・4・14）

牧　冬彦（昭17・3文丙）

はじめに

ご紹介頂きましたように私は三高は昭和十七年三月卒で御座います。ここにお集まりの方のなかに、旧知の方も何人か見えていますし、殆どの方は昭和十八年前後の卒業で、私と同年輩ということになるのではないかと思います。私は去年一切の公務を離れまして、やっと肩書無しの生活になりました。公的な立場でものを言うことは一切差控えさせていただいているのですが、ここは同窓生ばかりの内輪の会なので、思い付くままに、ざっくばらんにお話しさせて頂きたいと思います。

一九九五年一月一七日朝、神戸は震度七の地震に襲われたのですが、率直に申しまして、震災当時の状況がどうであったかということをあまり詳しくお話しするのもどうかと思います。我々年代の者はよく昔の戦争のことを聞かれますが、戦時の状況をいくら詳しく説

明しましても、多くの場合そういう話を聞く人にリアリティが全く無いのですから、喋っているこちらがただいらだたしい気持になるだけです。それで、私はそういう話は殆どしないことにしているのです。震災の状況についても、同様の傾向があります。人間はまことに都合良くというか都合悪くというか、一日経てば一日記憶が薄れる、というのが真理でして、あの事件できりきり舞させられた当事者の我々でも、五年前の状況を正確に思い出してということになりますと、何かわけの分らんところで、がむしゃらにやってきたという印象しか残っていません。従いまして、震災当時の状況をお話ししても余り現実感はないと思うのです。

実は、震災から一か月ほど経って、災害復興対策本部という政府の臨時組織が作られました。それは五年間という有期の法律に基づいていましたので、まる五年が経過した今年の二月二三日に解散しました。このような節目のときを記念して、五年目で震災を振返って「創造的復興の集い」というシンポジュウムが、東京駅に近い国際フォーラムという会場で行われました。これは兵庫県を始め関係団体が共同でアレンジしたのですが、政府方面の方々それから色々の企業の方々などの関係者が大体四、五百名お集りになりました。私も当時の商工会議所会頭であるということで、会場でスピーチをさせられました。

こういうことがありましたので、そのときに申上げた、私の率直な印象で今に至るも持

続けているような点を、ここでお話をしてみたいと思います。

天災は敵である

例年一月一七日になると、マスコミ各紙が全紙をあげて震災特集を組むという慣行が、この震災以来ずっと続いているのですが、今年の一月一七日も丁度五年目ということで、各紙がこぞって震災の特集号を組みました。そのことについて文芸春秋の二〇〇〇年二月号に、京都大学の中西輝政教授が非常にめりはりのきいた論文を「日本の敵」という題で書いておられます。そのなかで中西教授は、「敵」という言葉を、エネミイという本来の意味での敵とライバルという意味での敵、内なる敵と外なる敵という二つの概念に使い分けて、次のように論じておられます。

震災の報道をするというのはいいのだけれど、どの新聞を取ってみても、震災の被災者の悲しみという点を中心において、記事が編集されている。まあ三〇万人の被災者がいたのだから、こういった人達が今どういう状況で過しているかということは、これをそれ自体情報として追跡することは勿論大切なことであるのかもしれない。しかし震災の教訓ということを考えると、今日の日本にとって最も大事なことは、今後こういった問題が起ったときどうするのかということについての一点にあるはずである。好むと好まざるとに拘

らず、我々は震災列島といわれるこの日本列島に住んでいるのだから、この震災という内なる敵、要するに内なる敵に備えることが、何よりも必要優先されて然るべきだと思う。ところが、残念ながら今日のマスコミでは、あれだけの紙面を費やしていながら、そういう観点でことを追求しようという文章が全くといっていい程無かった。これは一体どういうことか。迫り来るものに目をそむけて、気分としての優しさだけが蔓延する戦後日本の特有の弱さ、衰えというものが、これを然らしめているのではないか、というのが中西教授のこの論文のいわばポイントであります。

勿論、彼は地震のことばかり言っておられるのではないので、まさに日本という国をめぐる内外の敵に対して、どういうスタンスでこれに臨むべきかということを論文の主体にされているのです。私はこの論文を読みましたときに、一人の国際政治学者である大学教授が、ここまでのことをはっきりと言切っておられるのに、同じような観点でものを考えることが、日本の朝野の世論なかに余りにも少な過ぎるという感じを私は持ちました。

私は今年の東京フォーラムでのシンポジュウムのときには、この中西教授の論文をまだ読んでいませんでしたが、私がそこで一五分程しゃべりましたその中身は、全くこういう観点からの発想でした。私は今日まで色々な発言を求められる機会がある毎に、何時もそういう観点でものを言って来たつもりですが、殆ど反響らしい反響を呼びませんでした。

村尾さんが横におられて恐縮なのですけれども、こういうことは新聞記事にならないという非常に情けない状況を、今日まで経験をしてまいりまして、これは一体どういうことなのかと思っているのです。

とにかくあの一月一七日五時四六分はまだ世の中は真っ暗で、私もよく眠っていました。私が住んでいますマンションは、新幹線の新神戸駅から一キロ程東、大阪寄りに寄ったところの一番山裾にありまして、そこから上はもう山だけで、民家はありません。私は一五階建てのマンションの一五階に住んでいます。一言で言えば展望台のようなところです。私は関東大震災をはじめ地震というものは、広範な地域で横に大揺れに揺れるものだと、自分勝手に感じとして思っていました。ところが、今度の阪神大地震、直下型といわれる地震は、考えていたものとは全く違いまして、住んでいるところの下から全身を蹴り上げられるような衝撃でした。その瞬間に家具という家具は全部倒れますし、自分の部屋に置いていたテレビはすっ飛びました。停電で真っ暗ですから何とか明りを探さねばなりません。仏壇のところまで行けば蠟燭とマッチは置いてありますので、それを点けるより仕様がないと思って、寝室から一歩外へ出ました。キッチンを通り抜けてリビングから座敷の方へ行こうとしましたが、家具という家具は倒れ、ガラスや陶器の食器類が全部床に墜落していまして、一歩も足を踏出せません。暗がりのなかを足でそろそろ触りながら進んだ

のですが、ガラスか何かの破片で足の裏を切りまして、そのときは分らなかったのですが、後で見ましたら相当の出血をして、絨毯の上に点々と血痕が残っていました。そういうことでとにかく家内を呼び出しまして、何とか仏壇のある座敷まで辿り着いたのですが、そこであっと驚きました。仏壇の横に碁盤と碁石を置いていたのですが、その碁石が八畳の部屋全体にばらまかれ、更に仏壇の線香立てがひっくり返って、そのへんが灰だらけになっていて手の着けようもありません。寒いものですからシャツを着ようとしましたが、着替のシャツの上に散乱した色々なものが積重なっていますので、それを着るわけにもいかず、結局毛布を引張り出して、体にまとって夜の明けるのを待つという状態でした。

地震から三〇分程して突然電話が鳴りました。川崎に住んでおります私の娘が川崎から電話を掛けてくれたのです。何かお母さん神戸は大変なことになっているらしいよ、どうしたの。こっちは停電でテレビもラジオも役に立たないものですから、状況がつかめません。真っ暗ななかでただ立往生しているだけで、本当に何とも話にならないような状態でした。そうこうしているうちに電話が途切れまして、それから後は電話は一切不通になってしまいましたから、いよいよ何も分らなくなるというような状態でした。

そうこうしているうちに夜の白々明けを迎えまして、私はベランダへ出て東神戸一帯を見下ろしました。まあとにかく真の静寂です、世の中がしんと静まり返って物音一つしま

せん。目の前に私の会社の製鉄所がありまして、そこでは高炉に火を入れてから四〇年、一日も止らずに動いており、煙突から絶えず白煙がたなびいていました。それがぴったり止っています。要するに動くものは何一つ無いという静寂が、しーんとした形で東神戸一帯を占めていました。

そうこうするうちにヘリコプターが飛んで来ました。これは言うまでもなくマスコミ各社のヘリコプターです。数えてみますと、五機、七機、一〇機、一五機、神戸の上空は一方は六甲山ですから、非常に狭い範囲を一〇数機のヘリコプターがぶんぶんぶんぶん飛回る、恐らく午前中一杯ぐらいはうるさいぐらいに飛回っておったのではないかと思うのです。私はその時とっさに、自衛隊、警察、消防などのヘリコプターが一機でも混じっていやしないかと思って一生懸命に見るのですが、一向その姿がないのです。

私は今兵庫県の防衛協会の会長を仰せつかっていまして、中部方面総監とも親しくしています。中部方面総監部は伊丹の伊丹空港の直ぐ傍にあります。中部、近畿、それから中国といった西日本一帯をかなり広く管理する方面隊で、伊丹には第三師団という実働部隊がいます。そこからヘリコプターで来れば、大体一〇分か一五分あれば飛んで来られる距離です。何故あそこからヘリコプターが飛んで来ないのか、私は本当にそのときそう思いました。結局、わけが分らずじまいでその日の午前中は終わりました。

政府の危機管理

「正論」という産経新聞から出ている雑誌があります。あの年の三月の初め頃でしたか、その編集長のインタビューを受けまして、こういう状況のなかで私はそもそもこの震災というものをどう考えるかについて、いろいろ話をしました。私に言わせれば、今度の地震は無警告のミサイルを不意に撃ち込まれたようなものだと考える以外にない、だからそういう風なものとして、その対策を考えることが先ず第一に必要なことではないか、ということをそのとき私は申しました。これは五月号に掲載されました。

話は前後しますが、震災から三日め頃でしたか、当時の首相の村山さんが神戸にお見えになりました。恐らくヘリコプターか何かでお出でになったのだと思うのです。受入は県当局が当っていましたが、あの道路状況では我々はそこへ行くこともできません。結局、私共はその時はお目にかかることはできなかったのです。その時県の方から連絡がありまして、村山さん対して、経済界として何か要望することはないかといったお尋ねがありました。私はその時に、こんな状況の中で、何か要望することはないかと言われて、あれをしてくれこれをしてくれと言っても、どうせ総理大臣が自分で手を下されるのではないのだから、そんなことはいい。日本の総理大臣は少なくとも陸海空三軍の最高司令官である

はずである。だから一刻も早く陸海空に総動員令を出してくれ。そして馳せ参じることのできる人を全部ここへ連れて来て、この破壊された街を何とか元へ戻すために、自衛隊の持っている力を全部投入してくれ。それだけ言ってくれればそれ以外には何も言うことはない、という返事をしたことを覚えています。勿論知事に直接お願いしたわけではないので、その通り伝わって、しかもそれが地元の要望として総理の耳に入ったかどうか、それは私には分りません。

確かに内閣総理大臣は三軍を統率する最高司令官であることは間違いはないのですが、実際にそれを発動する発動の仕方は、今の日本の法律体系のなかには規定されていない。現行の法律体系のなかには、そういった時の危機管理の在り方というものについて、何ら具体的な手順が決められていない。当時、私自身も不勉強でこのことを知りませんでした。その後いろいろな方に教えて頂き、とくに佐々淳行さんの本を読んだり、お話を聞いたりして、なるほどそうか、そういうふうになっているのだなと納得したのです。ですから、何方が総理大臣をおやりになっておろうともできないことはできないわけで、村山さんを責めるわけにはいかないなという感じがしたのです。

そういうことと関連して、自衛隊の初期の初動動作が遅かったということがマスコミや評論家の口から盛んに言われました。それは知事が要請をしないと、自衛隊は出動できな

いという立前になっているので、知事からの出動要請が遅れたために自衛隊は出られなかったのだ。これは非常に分ったような理窟であります。けれども、実はそうではないのです。自衛隊も自分の方で必要とあらば出動することが認められているのです。事実ヘリコプターの部隊は全部集結して伊丹の駐屯地にスタンバイしておったようです。私は中部方面総監とお話をしたときに、どうして総監あのときに来てくれなかったのですかと聞きました。実は、ヘリコプターを出したら世論やマスコミがどんな批判をするかということが頭にあって、ヘリコプターの出動について自分には判断が付かなかった、だから結果的に知事からの要請を待つということになってしまったのだと総監は答えられた。確かに、知事からの要請も遅れました。ですが、緊急の知事部局の会合をやろうにも、庁舎に集って来たのが、何しろ五、六人くらいしかいないという状態だったそうで、みんなが被災者なのです。とにかく出て来られないという状態の中ですから、出動要請が遅れたとか何とかばかり言うのは、もっての外だと思うのです。

何か事が起った時に一斉に行動する、いわゆる危機管理、危機管理という言葉は今でこそ常識的な言葉になりましたが、当時の日本にはそんな言葉すら無かった。災害救助法に基づく緊急出動というのはありましたが、これは一挙に六五〇〇人もの人間が命を落す、三〇万人の人が被災する、全壊家屋が一〇万戸もあるというような状態を誰も想定してい

なかった。やはり、このことが一番のポイントではないかと思うのです。

話が少しそれるようですけれど、その後二か月して、皆さん御承知のとおりサリン事件が起りました。私もあのとき東京にいまして、何か霞ヶ関の周辺がものものしい状態になっているのを何だろうと思って家へ帰りました。新聞やテレビを見て、オウムという何か変な宗教団体が地下鉄にサリンをまいた事件だと知りました。それでマスコミは今度は一斉にサリン、サリン、オウム、オウムということになりまして、震災の状況というのはいっぺんに影が薄くなってしまいました。

私は九五年、震災が起りましたときから暮れまでに、数えてみますと五〇数回東京と神戸を往復しています。ですから東京の空気と現地の空気とが、私の場合は一つになっています。その私に対して、あんな変な事件が起ったものだから、報道の重点がそちらに移ってしまって、その後神戸がどうなったのかについては誰も何も言わない、神戸は本当に気の毒だ、と言ってくれた東京の友人ががいます。

私はその時に、それは有難う、しかし、偶然というとおかしいけれど、二つの事件は日本の国土と国民を、全く予期しない形で襲ったという点で同じ性格の問題であると考えるべきではないか、と答えたのです。だから神戸の被災地の人間として、オウム事件が起ったことによって、神戸の情報が東京方面へ伝わらなくなったことでどうこう言うつもりは

全くありません。むしろ、これはこういう二つの事件を同じ次元でとらえると、一方が言うまでもなく天災、一方はまぎれもない人災で、性格は全然違いますが、ただ誰も予想していなかったという点においては、全く危機の様相を一にする、と私は思うのです。

ところがその後、ご存知のとおり色々な人が出てきて、テレビ、新聞その他で、オウムを話題にして百万べんもしゃべりました。特にオウムの広告宣伝部長という人が、ああでもない、こうでもないと御託を並べる。それにテレビは何十時間捧げたでしょうか。私はむしろそのようなことが、今の日本の社会を間違った方向に引張っているという気がして仕方がないのです。

これもついでに申上げますけれども、その後オウムのテロリスト達に破防法を適用するかどうかということで、日本のマスコミが珍しく真っ二つに割れました。はっきり申上げて、朝日新聞、毎日新聞が反対派の、読売新聞、産経新聞が賛成派の、それぞれ両巨頭であります。それに対して日経新聞は中間という感じでした。私共は何を議論する必要があるのだ、あれだけ明々白々と日本の国家の中心部門を襲撃しようというはっきりした意図をもってやっている犯罪集団を、人権がどうの宗教がどうのと言っている余地があるのかと、私は震災被災者の一人として、本当に腹の底から腹を立てておったのであります。マスコミがそういう状況であるのみならず、その後あの事件のために設置された委員会で、

破防法の適用を見送るという結論が出たということに対して、現在の日本の病状はそこまで進んでいるのかと、痛切に感じたということを今申上げたいと思います。

私は全く震災とは縁のない話を申上げているようですけれども、私にとりましては、震災とサリンの二つの問題は実は同じ次元でとらえられるべき問題なのです。

縦割り行政と横割り組織

先に述べたように、政府は二月二三日に災害復興対策本部という統一的な組織を作ってくれ、事務所が兵庫県庁の一角にできました。この組織は総理直轄です。つまり官房長官の所管に入っていて、その下に国土庁の事務次官が事務局長としてこれを束ねておられます。それに大蔵省、文部省等、関係各省庁の課長クラス、審議官クラス、それより下位の人が出向で来ています。それに被災地の民間代表も加わってくれということで、神戸は私共の会社からも一人、大阪は関西電力、大阪ガス、それから金融機関の代表で興銀の大阪支店長、この四人がこの組織に加わりました。

ところがここは事業予算というものを全然持っていません、関係各省庁相互間及び現地との色々の情報連絡をするだけです。我々はそこで、こういうことがあるからこういうことをやって欲しいという話をします。分りましたと答えてくれます。彼等は非常に物分り

の良い方ばかりで、それはもう気持の上では皆さんそれは大変だろう、何とかしてあげたいという気持を持っておられるということはいささかも疑う余地はないのです。けれども、さてしからばどうなるかというと、例えば道路の補修を一つするにしても、その予算はがっちり建設省が握っていますから、実は建設省へ行って話をして下さい、こちらからも話はつなぎますからということで、結局そちらへ行かなければならない。運輸省へも行かなければならない。そういうことで、臨時編成の一つの組織を作って頂いたけれども、実際の我々の立場から見たら、手間暇は倍かかるようになったということで、一個所で話がすっと通って、その場でそれに対する反響が返ってくるということが殆どないのです。

御承知の通り、神戸の港湾設備は日本最大で、バースの数だけで一九〇位はあると思います。これが全部やられて、一時は生きているバースが一つも無いという状態におちいりました。これを修復しないと、神戸は港都としての機能を全く喪失するということが分っていましたから、何とか早く修理して欲しいと言うのですが、実際にその予算を握っているのは運輸省で、運輸省と話をしなければなりません。学校も随分やられました。神戸大学は学生だけでも何十人も死んでいますし、甲南大学、その他有名な大学が全部被害を受けました。それを建替えるためには勿論文部省に行かねばなりません。以下同様です。

このような事情があるものですから、私自身は被災地の経済界の代表として、さっきも

申上げましたように、毎年五〇回以上もの東京にやって来て、要するに通産省、建設省、運輸省、大蔵省といった役所を、靴の底をすり減らすようにして歩いて、地域の事情を上申し陳情し議論したのです。私も現役時代は通産省とか建設省へは時々足を運んだこともあります。今度の震災で、文部省、労働省、外務省などあまり行く用事は無かったところを除いて、私は霞ヶ関をこれくらい走り回ったことはありません。

地域においては、県、市それから我々の経済界、その他の組織はそれなりに動いておったと思うのです。ところが政府は、地元の事情ということになりますと、県はどう考えているか、市はどう考えているか、経済界はどうか、必ずこれらをセットにして対応を迫ります。今から思えばまるで漫画ですが、ビルも倒れている、家も倒れている、コンクリートの瓦礫もあれば、木造家屋のものもあるというめちゃめちゃな状態で、とにかく何十万トンという瓦礫が積上がっているのですから、これをどんどん撤去しなければならない。県、市は勿論お手上げ状態で何にもできない、国の助けを借りなくてはならない。ところが、国のどの役所がこういうことをやってくれるのか分っていなかったのです。

私は始め建設省ではないかと思ったのですが、違うのです。厚生省なのです。厚生省へ行かないと話は通じない。私は厚生省へ行きました。とにかくこれを除去してもらって、道を通れるようにしてもわないことには、経済活動が成立たない、ということは経済復興

はここから始るのですということを、厚生省の局長さんを相手に力説しました。ところが、いやいや貴方の立場は分るけれど、我々は別に経済復興をやるためにここでこういう問題を扱っているのではありません、というのが局長さんの答えです。

それでは何のために貴方にこんな話を持ちかけなければならないのかと聞きますと、いや、都会というものは色々な雑物を出します、それを除去して綺麗にしておかないと環境上、衛生上まずいから、厚生省の生活衛生局の所管になっているのですとの答え。震災で積重なった一二万トンの瓦礫も、要するに廃棄物であり、ごみであるというのが厚生省の見解でした。あの瓦礫の山を日常のごみと同じ範疇でみている、あまりにも双方の捉え方の差がひどいことに、その時は相当気も立っていましたから、食ってかかってもどうにもならないということは分っていましたが、憎まれ口をたたく結果になりました。

結局、局長では話が通じないので次官のところへも行く、そうやってあっちこっち歩き回って、とにかく予算は付けてくれました。恐らく瓦礫の撤去費用だけで千二三百億円はかかったのではないかと思います。それを運び出すためのトラックが全国から集って来ました。これは仕事として来ているのですから、これに瓦礫を積んでそれぞれ指定された集積場所へ運ぶ、そのトラックで街の交通が渋滞し、外の車は一切動けないというような状態がしばらく続いておったのです。瓦礫の問題一つとってもこのようにして、至る所で頭

をぶっつけ解決しました。

日本の官庁組織は縦割であると同時に、横にヒエラルキーが決っていますから、どのクラスへぶつかれば良いのかということが、これには大変なノウハウが必要です。局長に話をしなければならないものを、課長のところへ持って行っても、何かぐじゃぐじゃ言っているだけで全然話にならん、いきなり次官のところへ持って行けば、これは次官に怒られるだけでこれも具合が悪い。結局は局長のところへ行って始めて解決する。つまりそういう横運動と縦運動を、これを十二三ある省庁の中へやっていますから、それは何回来たって埒はあかんわけであります。

官庁を訪問するときには、必ず陳情書なり要望書なり意見具申書というものを持って行き、それを関係部署に配らなければならないのです。そうした事務に会社の職員を使うわけにはいきませんから、結局、県とか市とかの東京事務所の職員が、全部そこのところの段取をつけたり、それらの印刷物を関係部署に届けたりしてくれるのです。

それで、ある地方の方に、お宅でもしこのような災害が起ったら、何処の役所へどういうふうに持っていけば最も予算が取りやすいかということだったら、結構我々の方でお教えできますよ、というような冗談を言ったことがあります。

被災者と復興

このようなことでと兎にも角にもやりました。私は今まで随分をなさないような話をしていますが、結果的に一年経ち、二年経ってしてみますと、これはまた日本の国というのは、結構というか不思議というかとにかく事は進むのです。しかも非常にスピーディーに。それで二年目、三年目位に日本に来られた外国のお客さんと応対していて、彼等が異口同音に言うのは、とにかく震災の痕跡が殆ど目に付きませんが、何処でどういう状態で起ったのでしょうかということです。確かに街を車で走っていましても、殆ど災害の跡というのは見えないくらいに整備が進んでいるということです。こういう行政能力というか、事柄を手順良く運ぶという点については、日本という国は本当に有難い国だと私は思うのです。政府に対していろいろ言分、先程、申上げましたようなことがあるのですが、しかし普通の感覚からすると、これくらい見事にあれだけの大災害を乗越えた実績、恐らく世界のどの国においても、同じような復興実績をあげることは無理であろうと思います。

それから後色々な震災が世界各地で起りました。そうしたなかには瓦礫に埋まった震災地をそのまま放置しているひどい地域もあります。勿論日本のように木造家屋ではないので、壊れた建物を再建するよりも、コンクリート等が積上がったままにして置いて、別の

場所で街づくりを始めるというようなことをやっているところもあります。

牧さん、いっぺんメキシコへ行って見てご覧なさい、この前の地震の跡がいまだに残ってますよ、日本の場合はそんなことはしないからまあいいではないですか、と政府の方から冗談めかして言われたことがあります。確かに、メキシコ地震ではメキシコシティの中心部がやられたのですが、十数年もっと長い間ですか、手つかずで放置してあります。

たしかに、政府がけしからん、誰がけしからんというようなことを言ってみても仕方がないのですが、さはさりながら、こういう問題を取上げるときには、もう少し行政官的な見方を離れて、政治というレベルでの問題の取り上げる、政治的見方が必要なのではないかと考えました。私はこういった観点から言論の動向を見続けて来たのです。

然し、現実に我々の眼の前で起こったことは、とてもそんな見方でものを見ることとは程遠い状況でした。ということは、とにかく震災で三〇万人の被災者が出て、仮設住宅が五万戸、そこに住んでいる人が、一〇万人位いるのです。そういう人達は何のかんの言いましてもやはり気持の上で満たされないものを持っているます。例えば、仮設住宅ですが、我々が見るところ、あれはとても良くできていると思います。とにかく終戦後のあのバラック小屋を知っている人間から見ると、はるかに良好な居住性を持っています。何よりも、ガス、電気それから電話、それら全てのものが完備されていますし、一軒一軒全て洗濯機、

クーラーが付いています。そういう住居ですけれども、そこに入居した人達は、殆ど自分の家を失い、家族を失った人達で、それは誰が何と言っても、やっぱりいらいら気分というものは避けられません。幸いにして家が倒れることは免れたけれども、しかし半壊の家をかかえて、これを建直すにはまた何千万円かの金がかかるということで、どうしたものかと思案投首している人がいるわけです。そういう意味では、誰一人満足な気持でいる人はいないという状態であります。

かつて、北海道奥尻島の地震のときには、全国から集った寄付金を一人頭に割りますと一千万円位になり、被災された人達は一人で一千万円の寄付金を受け取ったのです。ところが今度の震災の場合は、全世界及び全日本国から皆さんの浄財が何と千七百億円集まりました。千七百億円を頂いているのですが、何しろ四〇万の人に分けるということになりますと、一人当り三〇万か三五万円位の現金しか渡すことができませんでした。これは奥尻島の場合に比べて、あまりにも微々たる額です。しかしあの仮設住宅を一戸建てるのに大体三五〇万くらいかかります。これを五万戸作っていますから、それはもう相当な出費です。これは日本というこの豊かな国であるが故に可能であったということはまぎれもない事実です。しかし、そこに住んでいる人は、そこに住わしていただいているから有難いという気持の人もおりましょうけれども、しかしやっぱり一千万円もらった北海道の人達

に比べれば、俺達の当りは少ないというふうな気持で、世の中を斜めに見ている人も随分いるのです。

そこに、政府攻撃の宣伝をするグループが、空から舞降りて来たような形で突然出現し、神戸を根城に活動を開始しました。とにかく日本政府は金の出し惜しみをしている、被災者に対して金の出し方が足りない、被災者のために何もしてくれない、我々の要望は何一つ聞いてくれない、というようなことを、猛烈な勢いで繰返し宣伝する。それに共産党が乗るというようなこともありました。ところが、政府を直接攻撃しても、政府は遠いところにいますからこれはあんまり効果がありません。目先にいるのは当事者である市長です。つまり、行政を攻めるのです。これは本当にけしからんことだと思いました。

災害と自治体

現在の神戸市長の笹山さん、この方は今風の要するにファッショナブルなテレビ向きの人間とはおよそ違った人でして、しかし実務家としてはこれくらい着実な行政官はいないと私は思う、そんな人です。何しろ彼が神戸市役所に就職した終戦直後、彼が一番最初に与えられた仕事が、戦災で破壊された神戸市の都市計画作りですから、ご本人にはよくよく因縁があると思うのです。

戦災で破壊された後の町作りをやるべく計画を立てて、未だに実行できてないところが何か所かある。団子のような形で残っているところがある、これが癌なのです。どうしてそれが整理できないのか、大げさにいえば、私有財産権どうのこうのという話になってしまって、そこへ不法占拠のようなこともあるのでしょうが、とにかく二〇年、三〇年と住み着いている間に、所有者が変わって既得権益化してどうにもならなくなってしまった。こういうところをこの機会に一掃しなければいけない。これは彼が心に秘めた真情です。しかしそんなことを公の場では絶対に言えません。結局、震災後の街づくりをやることにつきましても、まだまだ途上です。とにかく話が通らないのですから、住んでいる人達の意見が先ずまとまらない。そこへ行政が乗出して行ってやろうとしても、よけいこんがらがって訳が分らなくなって、にっちもさっちも行かなくなるのが今日の状態です。

かつて関東大震災のときに後藤新平さんが、昭和通りを一気に通した、というようなことが今でも語りぐさとして残っています。東京のように大きい街で神戸のような災害が起ったときに、私有財産権の問題を本当に何とかしないと、街づくりということすら今の世の中で果してできるかどうか。とにかく皆さん信じられないでしょうが、震災で家が倒れます、道をふさいでいます、これを取除くためにその家の所有者の了解が無かったらできないのです。ですから、警察の部隊、いわんや自衛隊が勝手にブルトーザーなどを持って

きて取りのけようものなら、後で何を言われるかわかりません。とにかく、今の日本という国は、個人の利害というものががんじがらめにからみあっていまして、しかもそれが至上の価値として今や日本の政治経済の上に盤踞していますから、これは本当にどうしようもないと思うのです。

実はこの問題に直接関係はないのですが、有名な田原総一郎さんという方のサンデイプロジェクトというテレビ番組があります。それに出た覚えがあります。知事と市長と私と三人で田原さんと話をするということで、私は経済界の人間ですから、行政的な意味の責任は無く、我々の実際の状況を話をすればいいということで私も出席しました。あの年の二か月程後で、私はまだ背広なんかを着て街を歩けませんので、作業服を着て襟巻をしたままで出演しました。一つの場所に全員が集ることができませんでしたので、県庁と市役所の二個所に分れて、私は県庁の方に合流し、市役所の方は、そのとき市長が都合で出られなくて、代りに或る助役が出られました。テレビのモニターを見ながら、三人で質問に答えるということをやったのですが、田原さんは例の調子で歯切れ良く切込んで来られ、当然の事ながらこの破壊された神戸をどう建直すかということについての質問が多かったように思います。

行政の方は、国に助けてもらいたい事項もありますが、しかし自らどういう街づくりパ

ワーを持つかということついては、これは確かに責任もあるし、やらなければならない仕事には違いないのです。しかし、先程から申上げておりますように、あのどさくさの中でそんなに気の利いた街づくりプランなどというものができるはずがないのです。

皆さんよく聞いておられると思いますが、田原さんという方は畳みかける形で質問をされます。私共聞いていまして無理なことを聞くなと、そんな短兵急に質問しても答えられるはずがないではないかと思っていました。たまたまその時受答えしておった助役が、これは非常に几帳面な、生真面目な、そういう人柄の人でした。それで、神戸市が街づくり計画ととして震災前からずっと経常的にやってきていたもの、その時そういうことが頭にあったのでしょう。彼はもう問いつめられて仕方がないから、実は以前に立てたこういう案がありまして、このときにはこういう形でということを説明しようとしたのです。そうしたら田原さんが、助役、そんなことを私は聞いているわけではありませんよ、それは昔の話でしょう。今の震災の中でどうするかという話を聞いている。例の口調でした。

私がもしそれを言われておったのなら、貴方はそんなことを言うが、いっぺんこの現場へ来て、そしてこれをどうするかということを貴方の明敏な頭で考えて下さい、私はそんなことはとてもできない。今日明日の仕事をどうするかということを、今苦労しているなかで、そんな気の利いたモデルプランなんて出て来ようはずがないと、そのとき私はテー

ブルを叩いて反撃したと思うのです。そしたら彼は、いっぺんで引込んだと思うのです。他人のことですけれども、私はあのとき程、あんなにくやしい思いをしたことはありません。それをわざわざプランが無いのか、計画が無いのかとこう畳みかけるものだから、仕様がないから几帳面に三年か五年前に作った案を説明しようとした、これが田原さんの気に入らなかったのです。それを言うなら、私はもう少し言い方があるだろうと思います。その後、田原さんは政党関係の色々な人とか、東京都知事選のときとかでも随分やっていました。その番組を聞いていますと、なるほどあの人はああいう言い方をする人だと思いました。私なんかが聞いていますと、言う方よりも聞く方がよっぽどひどい。けれども、神戸市の一助役には、それを切って返すだけの力量がないものですから、もうそう言われると言葉に窮してしまって、黙ってしまったのです。

だけれども、これが今の世の中というもの、そういうものかなというふうに私も思いました。結局何のためにこういうことを言っているかというと、ことほど左様に、ああいう事件が起ったときの行政というのは、つらい立場に置かれるのです。どんなことをやりましても、よくやってくれた有難うということは一つも言われることはないのです。それよりも、無責任にやって来てくれたボランティアの人達に感謝しましょう。ボランティアというのは大変なものだ、これはこれからの日本の政治というものはボランティアの人達に

よって動くのではないかということを、また学識経験者という人がしゃべるものだから、ますます行政機能などというものは、かすんでしまうのです。

危機管理包括法

こういう話をしていますと、きりがないのですが、やはり冒頭申上げました中西教授の言説ではないのですが、本当に政治という次元でこういう問題を捉える、という捉え方があって欲しいなというふうに私は今思っています。ただしかし、政治のレベルでそういう動きが全くないわけではありません。私の目に付いた範囲で取り上げてみます。

一人目は震災当時の官房長官を勤めておられた自民党の梶山静六さんです。梶山さんは「文芸春秋」の一九九九年六月号に「祖国防衛論」を書かれました。この方は党内事情のために政策遂行の責任ある立場から離れておられるようですが、私はいまの政治家の言動のなかで、我々から見てまさにそうだと思えるような筋の通った意見を公表しておられるのは、この方だけと言ってもいいと思うのです。

私はその論文を読みました時、私は商工会議所の会頭を辞めていましたが、直ぐ梶山さんに私信を出しました。一市民として貴方の所論にはまことに意を強くするものがある、是非そういう方向で日本の政治を引っ張って行って欲しい、と言ったのです。彼は何を言

おうとしたかということでありますが、結局日本という国に、危機管理包括法という新しい法律を作って、一朝ことある場合の総理権限というものをはっきりとさせておく必要があること、その場合の対策を包括的に取決める必要があることを言っているのです。彼はそのための色々なポイントを五つ六つ列挙していまして、私はそれを見てまことに当を得たものの考え方だと、私が震災直後から今まで、そういう観点で事が論じられ、少なくとも政治レベルの上で、そういった面での議論が深められているということが、あったのかなかったのかそれさえも分らない。もしそういうことに関するものの考え方が、少しも行われていないのならば、これは私は日本の政治家の全く怠慢ではないかと、いうふうに思うわけであります。

二人目は東京都知事の石原さんです。石原さんは東京都で自分としてはこういうことをやりたいということを、「文芸春秋」の一九九九年七月号に「東京よ、死より地獄を」という論文で発表されました。いろいろ仰有っているなかで、今日の話題に関係のある点でただ一つ、私が我が意を得たりと思いましたのは、次のようなことです。自分が都知事である限り、東京都民を神戸市民の二の舞にするわけにはいかん、神戸の二の舞は絶対にさせないというふうに自分は思う。だから自分は早速自衛隊の陸海空の三軍を統括するような、そして総理を頭においた一つの東京都の非常時防災体制というものを組む。そのため

の演習を来年の九月にやるということをその時彼は言っておられました。私はあの人のことだから恐らくやるのだろうと思っていましたら、昨日の産経新聞に、例の三国人問題でやりとりをした時の、彼の表現全文が紹介されており、その中にはっきり九月三日にそういった大防災訓練というものをやる、と書かれていました。これは勿論自衛隊の三軍を統括するわけですから、首相統括下に統幕議長を中心において、東京のそういう大規模災害に対する自衛隊の救援活動というものを、組織化してやってみるということを彼は言っていました。恐らく現在色々と準備が進められていると思うのです。

私はこういう角度でものを見てくれる政治家が何処かにいるはずだと思っていましたけれど、彼は始めてそれを言いました。もしそれで成功すれば、日本の各地の、例えば静岡県でありますとか、或は北海道でありますとかいうように地震の多発地帯の首長が、近隣の地域と緊密に連携をとって初動動作をいち早くやって、六五〇〇人という死亡者を例えそれが全部救うということができなくても、例えば五〇〇人減らすため、一〇〇〇人減らすためにどうするかという作戦が当然練られてしかる然るべきです。

ところがさっきから言っているように、こういう災害の場合には、気の毒な人がこうなっている、仮設住宅でお年寄りが孤独死する、その人の数が何百人であったとかいうようなことの報道だけが盛んに流されますけれども、本来六五〇〇人の人がどうしても死なな

ければならなかったのか、これが本当は四〇〇〇人で済んだのではないか、二五〇〇人助かったのではないかということを考えるべきだと思うのですが、誰もそういう考えをしません。私はこれが不思議でならないのです。

震災という明らかな自然からの脅威であっても、これは敵だというふうに考えたならば、じゃあどうするか、技術の粋を集めてこれに対する対応策を講ずることができるし、それで起ってしまった時には、物的な被害はともかくとして、少なくとも人命の被害を少しでも少なく食止めることができます。ところが、戦後日本は、何もしないでみんなと仲良くやっておれば何事も起らないという考えから、敵というものを想定した対敵行動というものを、全然忘れてしまった、というのが中西教授が論文で言わんとされたことです。

このような考えで物事に対処するのが、まさに政治的なアプローチであろうと、私は思うのですが、果してそういうことになっているのかいないのか。これは恐らく一々のマスコミやテレビの上に出てこないところで、密かに誰かが検討して頂いているということであっても私はいいと思うのです。しかし、本当にそうなのかどうなのかということは、石原知事のように自分の考えを勇猛果敢に仰有らなかったら、それは分らないのです。

結局先に申上げましたように、日本の政治というものには、私共は十分に感謝をしていますし、これだけの物的な被害をケアするために恐らく十数兆円の金が投じられたであり

ましょう。外国の人が異口同音に日本という国は本当に素晴しいと言います。それはその通りだと私共も思います。だからこの国をただ悪し様にののしることによって、我々の受けた傷に塩をすりこむようなことを、私はしたくはありません。

しかしそれにしてもなおかつ、どうしても心配だというか、安心して自らの生命身体の安全を託し得るそういう仕組が、我々の周辺に出来上っているのだろうかどうだろうかということについて、一抹の不安を払拭することができません。

今日は皆さん方の考えておられたことと少し次元の違うような話を申上げたかもしれません。しかし当事者の一人として私としてはどうしても申上げておきたいというふうに思ったことです。大体こんなところで終らして頂きたいと思います。

〈前神戸商工会議所会頭〈震災当時〉〉